

町割りの移り変わり

都市の区画整理によって京都御苑の地取りも変遷してきましたが、1997年から2002年にかけて行われた考古学調査によって、平安時代にまで遡る多くの遺物が発見されました。この発掘調査は、京都御所のすぐ東にある迎賓館の建設の際に実施されたものです。

この地区が朝廷に仕える貴族の住居区画（公家町）として使われていたすべての時代にわたる遺物が発見されました。考古学的な分析により、この地区に公家町が形成されたのは1610年ごろと考えられています。1708年の大火の後、地区の再建計画が立てられました。防火対策として道幅を広くし、家々と御所の間の距離も広げられました。

発掘現場

遺構全体風景

江戸中期の町割り

江戸後期の町割り

鷹司邸跡の出土遺物

鷹司家は、摂政や関白を務めた五摂家の一つです。発掘調査により、皇室を示す菊の御紋をあしらった菊文小型瓦など、様々な陶磁器が出土しました。

迎賓館の建設に伴う発掘調査で出土した遺物。その多くが江戸時代の公家町に関連するものです。